参加に意義

留学生の日本語スピーチコンテスト

12月11日、多摩キャンパス11号館で、留学生による「日本語スピーチコンテスト（5回目）」が開かれた。計16人の留学生が参加し、自分の留学生活についてや、社会や世界に対するメッセージを日本語で素直に伝えた。7人の先生方の審査により、特に優秀なスピーチには「優秀賞」「最優秀賞」が与えられた。しかし、参加者にとっては受賞の有無より、参加することに意義を感じている様子で、スピーチをしている時、終えた時の一人ひとりの楽しそうな顔、満足気な表情がとても印象的だった。

（学生記者・木瀬　恵子）

話したい　伝えたい

「中央大学に学んで」

現在、中大には500名以上もの留学生が私たちとともに学んでいる。その中で、あなたは何人の留学生を知り、交流をもっているだろうか。

この日、最優秀賞を受賞した一人、匡遠寅さん（中国・商2、タイトルは『中央大学に学んで』）。彼女は日本に来て三年半になる。中大に入った頃、周りにこんなにたくさんの日本人がいるのに、日本人の友だちがいないと思い、友だちを作ろうと決心した。ある時、教室で「隣の席いいですか？」と日本人学生に話しかけられた彼女は、喜んでその席を勧め、親しくなろうと自己紹介を始めた。すると、相手の態度は一変。その後は隣り合わせに座ることはもちろん、二度と話をすることもなかった。これは、いままでに彼女が体験した一番辛く、悲しい思い出だ。

しかし、彼女だけでなく、ほとんどの留学生が同じような苦い経験をしてきているようだ。「日本人と友だちになるのは無理」と感じる留学生は多い。悩んでいた時に、日本人の先輩から言われた言葉を彼女はとても大切にしている。「良い友だちが欲しいなら、自分が良い友だちになること」。その言葉を聞いた時、彼女は自分が心を開くことをせずに、相手が心を開いてくれるのを待っていたのでは、ということに気づいたという。以来、彼女にはサークル、クラスなどでたくさん友だちができた。「時に、けんかすることもある。でも、違う意見でも理解し、受け入れることで友情は生まれる」。

最優秀賞の匡　遠寅さん

毎年、一人で過ごすクリスマスやお正月に、昨年は友だちが家に呼んでくれた。食事、ゲーム、プレゼントまで準備してくれて、これは彼女にとって一番温かい、幸せな思い出となった。

どこを削るか困っちゃった

中国・匡さん

受賞後、匡さんに話を聞くことができた。「まだ実感がわかないんだけど……」と、にっこり。「本当はもっともっと話したいことがあった。1

800字以内で書かないといけないのに、5000字くらいになっちゃって、どこを削ろうか困りました」。でも、どうしても伝えたいのでと、「友だち、先生、そして何より、いろいろと相談にのってくれた、ホストファミリーの沢田さんに感謝の気持ちを」と話してくれた。

「日本語という壁」

言葉や生活環境、考え方の違い、留学生にとって、それらは想像以上に大きな壁をつくる。もう一人の最優秀賞受賞者、鄭惠元さん（韓国・文2、タイトルは『日本語という壁』）は、もどかしい気持ちをこういって表した。

最優秀賞の鄭　惠元さん

「自分の意見を伝えようとすればするほど、伝わらない」「勉強すればするほど、考え方の違いにぶつかる」。日本人には独特な考え方があるとよく聞く。相手の気持ちを察し、自分の考えを主張しない、押しつけない。この日本人特有の考え方が、多くの留学生の悩みのタネとなっている。彼女は、最初これを単なる「日本語の壁」と思っていたが、「文化の壁」だと考えるようになった。日本で生活しているのに、日本文化のまっただ中に自分はいない。とり残されているように感じた。でも、日本文化なんて理解できないと言わず、積極的に学んでいきたい。そして、いつか必ず、日本文化のまっただ中で話がしたいと熱く語った。

他の留学生から「私も同感」の声

韓国・鄭さん

受賞後、彼女は「恥ずかしいけど、うれしい」と照れ笑いで記者と話をしてくれた。スピーチして、他の留学生から「自分も同じ気持ちだよ」といわれて、参加して本当によかったと満足気な様子だった。

授業終えサッサと帰る 学生見ると寂しくなる

コンテストに参加した留学生に、参加の動機を聞いてみると、みんな口をそろえていった。「話したかった」「伝えたかった」と。留学生は日頃、どのようなことを考え、悩み、生活しているのか。なかには、正直に「寂しい」と気持ちを打ち明けてくれた留学生もいた。

日本に来て3年、大学の周辺で一人暮しを続ける彼女は、バイトも含めて、全部がキャンパスの中での生活。彼女は「大学は私のパラダイスだ」とはっきりいった。「どんなに辛くて、泣いても、早く学校に行きたいと思う。いろんな人や自然に囲まれて学校にいると、自分は決して一人ぼっちではないと思える」と。彼女は、大学での生活のすべてを大切にし、楽しんでいるように見えた。「学校に来ない。また、来ても授業を終えると、あわただしく帰っていく学生をみると、とても寂しくなるの」という、彼女の言葉がとても心に残った。

直接、話をしなくてもスピーチを聞きにいく。これも立派な異文化交流の一つだろう。言葉も生活も文化も日本人とはまったく異なった背景を背負ってきた留学生の話は、私たちの日常を少し違った視点から見直すキッカケを与えてくれた。

勢ぞろいした出場者